

浄土

1981-7

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 運輸省（特別授承認雑誌）第三十五号
昭和五十六年六月二十五日印刷 昭和五十六年七月一日発
第四十七卷 第七号



知人のこと

私があるご縁で四年程前からおつき合い頂いている藤村義朗氏について、少し御紹介してみたいと思う。藤村氏は、現在は、ジュビターコーポレーションという航空機関係その他の多方面にわたる貿易会社の社長さんである。元来は海軍々人で、第二次大戦中、ドイツのベルリン駐在武官として、身の危険をおかしてスイスのベルンにいたアレンダレス、後の米國務長官と会い、和平工作（「幻の和平工作」と呼ばれている）に努力した方であり、又、ユダヤ人をナチより護った方として有名である。当時のことは大森実氏の『戦後秘史』第一巻、第二巻に、その冒頭から触れられており、数年前にそれをもとに「ヨーロッパより愛をこめて」というドキュメンタリーTV映画にもなったので、あるいは御存知の方もあるかも知れない。戦後は戦友の遺族を何とか生活出来るようにさせて上げたいと、カッギ屋から始めて次々と色々な商売を

なさった結果、現在のような会社を作られたという事である。

一年の半分は、そのアメリカ支店に近い加州ラグナビーチで、半分は日本で過ごされるが、氏は事業と平行してモラロジの運動を熱心に推めておられる。昨年新築されたアメリカ支店事務所の床は、百人以上の人が氏の講演を聴きに集まっても大丈夫のように、重量計算して設計されたことである。

氏の企業精神は常に「大自然の恩に報ずる」という原点に立つて国家社会に貢献し人類の発展につくすという目的をかかげ、人間の品位を磨くことを社員に徹底させていられる。既に七十歳を越された氏の囲りには、絶えず二十歳前後の若い男女が氏夫妻と生活を共にしている。この中には後に社員になる人もいるが、大部分は人間の生き方、あり方を教育されている。氏はある時は懇切丁寧に、ある時は仏心鬼手で大変厳しく教育していられる。現代の若者がよくこの様に気持ちよく暮らしているものだと思える様だが、若い人達にも、この藤村氏の人間の生き方の高い理想と深い愛が伝わってくるからである。

う。この事はアメリカ人にも驚異の眼をもつてみられている様だ。氏のような方がアメリカのトップクラスの人々の中で堂々と生活され、日本を理解されるよう努力して下さっている事は誠に有難く、氏がアメリカ人に非常に尊敬されている事を私は誇りに思う。これには夫人の内助の功も見逃せない。多くのアメリカ人が夫人の温かな大らかなお人柄に魅せられて、ヨーコ、ヨーコと敬愛している。

小生の属している鎌倉ロータリークラブは氏のお世話で、このロス郊外のラグナビーチロータリークラブと姉妹クラブになっている。海岸の側にあるクラブとして立地条件がよく似ており、今後夏休みには青少年交換等を行う計画を立てている。小生も二回ラグナを訪問しているが、一般的に日本人が海外では日本人だけかたまってしまう傾向が強い中で、氏夫妻が高級住宅地のエメルドベイに入って立派に生活していらっしゃる事は本当にたのしい限りである。尚、氏が浄土宗知恩院の檀家でいらっしゃることを付け加えて頂けるのも、又、嬉しい限りである。

（佐藤行信）

|| 七 月 号 ||



三福業の中に浅あり深あり。その
浅業は孝養父母・奉事師長なり。

——『選択本願念仏集』

(定本法然上人全集 1 P.171)

目 次

法 話

- お盆を想う(上)……………後 藤 真 雄……(2)
直実と玉鶴……………渋 谷 賢 応……(6)

- 東西地獄絵図考……………福 島 瑞 江 ……(18)

- <随想> ほとけとの出会い(十三)……………佐 竹 隆 三……(10)

俳文コーナー

- 安居の俳句日誌……………渡 辺 杜 水……(24)

青少年教育の原点

- 青少年に感動の生活体験を!!……………石 井 俊 恭……(14)

- 往生を願う……………吉 田 勇之助……(27)

<読者のページ>

- 生 類 愛……………合 田 徹 雪……(34)

- 浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(30)

- <表紙のことば> たなばた ……………土 屋 正 男……(32)

- <表紙裏・巻頭言> 知人のこと ……………佐 藤 行 信

- 念仏ひじり三国志㊦——法然をめぐる人々……………寺 内 大 吉……(37)

表紙 土屋正男画

カット 大正大学美術部

法 話

お盆を想う (上)

○お盆の月

七月になると、見るもの聞くものが、日本は仏教国なんだなと思わせる。バスに乗っても、国電に乗っても、お坊さんの姿をよく見かける様になる。テレビのコマーシャルまでが仏壇の宣伝をしている。

釈尊の十大弟子の一人目連尊者が、亡母の餓鬼道に堕ちている姿を見つけ、その倒懸の苦を除く法会を行われたと伝えられている。七月十五日を中心として、日本にも早くから盂蘭盆会として、全国的に行われている祖先の日、父の日、母の日なのである。

目連尊者が人から神通第一といわれ、釈尊の十大弟子



後 藤 真 雄
ごとう しん ゆう

(浄土宗布教研究所長
東京・三好円通寺住職)

の一人にまで数えられている事を考えた時、今生きている有難さが、取りわけ母の恩による事をしみじみと感じる。そして七世の父母に対する報恩の気持が、祖霊をまつる行事となつて、印度、中国、朝鮮と伝わり日本に伝わった盂蘭盆会である。ウランバナと言う梵語が、烏藍婆那と音訳され、盂蘭盆と書かれ、更に「お盆」という親しみを持った言葉とまでなり、全国民的の格を持つていたのである。全国民の家庭に大小強弱の差はあっても、いかに多忙な仕事に従事している人でも、盆の三日だけは、せめてその一日だけは祖霊をまつる気になるのである。これは印度、中国、日本を中心とした全アジア民族の根強い習俗であり、地理的、風土的、血族的な根

底をもつ、東洋人の思惟形式のあらわれと言えるものはなからうか。

○人身うけ難し

婦敬の偈には、

「人身うけがたし　今すでにうく、

仏法ききがたし　今ここにきく、

……………」

法然上人の一紙小消息に、

「……うけがたき人身をうけて、あいがたき本願にあ

いて、……………」

又法句経には、

「得^ス生^ス人^ニ道^ニ難^シ、

ひとの生を

うくるはかたく、

生^ス寿^シ亦^モ難^シ得^ス

やがて死すべきものの

いま生命^{いのち}あるはありがたし、

……………」

右の様に先ず人間として生れついた事に氣付き、その有難さを再確認するのが、そもそもお盆の起りと考えられるのである。

人間として生れ出た事は、何でもないう様に思われ、あたりまえの様に考えられているが、たくさん生物の中で、人間に生れる事は稀であり、有る事難い事なのである。

目連尊者がまず自己を反省した時、まず人間に生れた事の喜びに氣付き、ひいて父母のお蔭、先祖のお蔭と受け取った処にウランバナの起因がある。

父の恩を知り、母の恩を知り、先祖の恩を知る。これを知恩と言うのである。総本山の知恩院の名はこの知恩である。恩を知ると、その恩に対し、少しでもおかえしがしたくなる、これを報恩と言うのである。報とはかえすと言う意味である。知恩は報恩へと進んで行くのである。

○おせがき

お盆の月になると、各寺々でお施餓鬼の法要が行われる。その根拠は「救拔焰口餓鬼陀羅尼經」に出ている説話である。阿難尊者が三日で命がつきるといわれ、釈尊の指示によって、三界万靈、有縁無縁の亡霊得脱の為に、一器の食を「加持飯食陀羅尼」をもって加持し、そ

の切法によって、その食が無量の飲食となつて一切の餓鬼の苦を救う事が出来、三日の命が、八十歳の長寿を保ち得たと、いう。

日本では空海が入唐して、この作法を将来し、以来全国的に各宗を通じ、お盆の月に修せられている、「総施餓鬼会」である。

これは阿難尊者が、三日の命といわれ、やがて死すべきものの、今生命ある事に気付いた所に、施餓鬼の起りがある。やがて死すべき者であるという認識、そして今生きている反省が施餓鬼会の大切な所なのである。

盂蘭盆と言ひ、施餓鬼といい、いずれも生命の尊重を土台とし、盆会は父母、先祖への知恩報恩の行であり、施餓鬼会は、世間様、天地自然のめぐみ、に対する知恩報恩の法会である。

いわば、時間的、空間的に自己を見つめるのが、お盆の月なのである。

医学的に生命を探究する科学的究明はかなりすすんでいる。生命とは何か、いろいろと良く考えるのが哲学である。もう一步進んで人生をかみしめるのが宗教なのである。

人生はかみしめればかみしめる程、味の出て来るものである。

○永遠の未完成

御先祖から人間としての生を受けつぎ、世間様からはいろいろと見えない力、冥利を頂き、天地自然の大きな恵みの中に育てられ、苦しかった事も、悲しかった事も、楽しかった事もあった。いろいろと苦勞の想い出はなつかしくもある。精一ばい働いて来た様な気がする。

省みて何にも悔はなかったか、あの時も失敗、あの時はやりそこない、あの時は努力がたりなかった、とやりそこない、出来そこないの失敗の連続の様な気がするし、あの時はうまくやった、あれだけは成功した、とまあまあそう落第点ばかりでもなかったと思える節もある。

然し自分の力でどれだけの事が出来たか、受け難き人身を得て、やがて死すべき身の、何の思い残すこともなく死んで行けるか、と考えると、一切が未完成なのである。ああもしたい、こうもしたいと思っていた事のどれだけが出来たろうか。あれもまだ、これもまだと完成への程遠い事を感じることである。よしんば後十年二十年

いや三十年生きのびたとしても完成は不可能であろう。

誰しもが、その完成を次代にゆずり、まかせて安心して、この世を去るのである。

それを受けつぎ、受けついで行く処に先祖代々のつながりがあるのである。

人生は永遠の未完成なのである。

自分だけの力で、何でも出来る、俺がやったのだと思いつている人の多い現代人に、せめてお盆の月位は人生を真面目にかみしめ直して貰いたい事でもある。

○畏れ敬う心

徳川期以後は各家庭に仏壇が置かれる様になったが、それ以前は仏壇はなかったのである。

お盆の日になると、竹を四本切つて来て、家の土間に立て、真菰を敷き、三方に竹筒を立て並べ、草花をさし、なわに、ホトツキやがまの穂などを、つるして、先祖の諸霊柵とし、取れたばかりの農作物を供えて、先祖の精霊をお迎えたのである。

今でも仏壇に小さな竹を立て、小さな真菰を敷く風習が伝え残されている。

面白いのは、胡瓜と茄子に、いもからの足をつけて、馬と牛の姿として、共にお飾りするのである。この馬や牛に乗って御先祖様の精霊が来るのだと、子供達に教えているのである。

これは御先祖たりとも、牛馬の労苦なくして生きる事は出来ず、お蔭様の代表が、胡瓜の馬であり、茄子の牛によって表現されまつられるのである。蓮の葉にご飯又はだんご等を供えるのも無縁の諸霊へのお供えである。馬が走り、人が走ってはじめて、現前の食物となる処から御馳走様の言葉が出来たことも思い合わすべきである。

かくてお盆の月は、平素蔭ながら守っていただく御先祖様をお迎えし、一家恙なく今日を過させて頂き、更に永くお護り下さる事を祈るのである。

あらたまった気持ちで、坐り直し、あらためて人生を見直し、今生きている事を喜ぶのがお盆であり。生きているという事は生かされているのだと思ひ及ぶ時、畏れ、敬うという事を感じてくるのである。

畏敬の情操教育の行われていない、現代の教育の欠陥さえ感じられて来るのである。



直実と玉鶴

渋谷賢応
しぶや けん おう

(茅野市心光寺住職)

古来信州善光寺はそのイメージが示すごとく悲劇の主人公がその中心となっているのは当然であって、その歴史の実録といかにはなれようとも、それが似つかわしければ善光寺の物語として、一般民衆に通用したものであらうし、またその故事がそのまま色々な像や墓地にも残っている。たとえそれがいかに後世のつくりごとであったとしても、その遺跡をつくり出すエネルギーと言うものはすばらしいものがあつたであらうし、またそれがくりかえされると、いつのまにか本物となってしまうのである。少くとも今日の私たちの目でそれを見たときに、そうさせずにはおかな

い強い力を感じとることができるのである。

この物語もそうであって、史実において正しいかどうかの範囲を越えて、私たちにせまる不思議な力をもっているのである。

熊谷次郎直実は一の谷の戦いで敵、敦盛の首をとったその時に、世の無常を感じて仏門に帰依したことはよく知られている。「法然上人勅修御伝」には次のような文がのせられている。

「武蔵国の御家人、熊谷の次郎直実は、平家追討の時所々の合戦に忠をいたし名をあげしかば武勇の道ならびなかりき。しかるに宿善のうちにもよほしけるにや、幕下將軍をう

らみ申す事ありて、心をおこして出家して蓮生と申しけるが、聖覚法印の房に尋ね行きて後生菩提の事を尋ね申しけるに「左様の事は法然上人に尋ね申すべし」と申されければ、上人の御庵室に参じにけり。「罪の軽重をいはずただ念仏だに申せば往生するなり、別の様なし」との給うを聞きてさめざめと泣きければけしからずと思ひ給ひて物もの給はず、しばらくありて「何事に泣給うぞ」と仰せられければ「手足もきり、食をもすててぞ後生はたすからんずとぞうけ給はらんと存する所に、ただ念仏だに申せば往生はするぞと、やすやすと仰せをうけたまはり侍れば、あまりにうれしくてなかれ侍る」よしをぞ申しける。誠に後世を恐れたるものと見えれば、無智の罪人の念仏申して往生する事本願の正意なりとて念仏の安心こまかに授け給いければふた心なき専修の行者にて、ひさしく上人につかへたてまつりけり。

以上が法然上人との出会いであり、師弟の

契りを結ぶ因縁でありそのいきさつである。かくして念仏往生を發願し建永二年二月八日には果さず、九月四日を予言して正念往生をとげたと結ばれているのであるが、善光寺にまつわる諸種の物語によると、この間に久下直光と所領を争い、將軍頼朝の面前で対決し頼朝の判決を不服として上洛して法然上人の門に入り蓮生と号した。時に五十七歳（善光寺さん、小林計一郎著）となっている。

この熊谷次郎直実の当時の事はつまびらかでないが「仏導寺縁起」によると次のような物語が伝えられている。

熊谷は戦いから帰ると間もなく出家してしまった。また大里郡熊谷郷には帰ってはこぬ人となったのであった。それは一家の離散を告げることになったわけである。このことが深い傷となり、内室は悲しみが積り積って帰らぬ人となってしまったのである。

あとにはその遺児玉鶴姫となってしまうたのである。姫が思うところはただ後の世の往

生のみであつたのである。

文治四年の春、玉鶴姫は侍女一人をとまなつて、信州の善光寺に向つた。途中深谷の国済寺に宿をかりたが、そこのお住寺が言われるには「今年若いお女中方が二人して旅されることは道中どんな事に出くわすかもわからない。剃髪・染衣の身となつて所志を果されたがよからう」と。

そこで二人はこのお住寺を師とたのみ、みどりの黒髪を切つて落し、玉鶴は妙蓮、侍女は皓月と法名をいただいて一路善光寺へとはいだ。

二人が信濃川中島の犀川のはとり綱島まで来たとき、姫は長途の旅のつかれから病となり、時たま炎暑の候となつて病は重く、どうすることもできなくなつた。この川を渡れば如来の浄土、夢にまでえがいたあの極楽にゆけるのに、その土を踏むことなく倒れるのはいかにも無念と、主従は助け合つて川端までよろめき出た。果しなく続く川音とそれ

をさえぎるかのような「よしきり」の鋭い鳴き声と、その向うに、かすかに見える如来堂の御灯を拝み「南無善光寺如来さま、どうぞこのあわれな二人のためにおめぐみをたれたまえ、私ども二人はこのおめぐみにすがつてようやくここまで来たものを、もう一度、最後の力をお示めし給え」と祈念をこめると、川霧の中から白髪白髯の老翁があらわれ、主従を小舟に乘せ、自らその綱を引き、向う岸に渡し、にわかに光明がかがやいて消えうせた。

一方熊谷蓮生は師法然上人に倣つて念仏三昧にあけくれていた。今日も今日とてあの門のかなたより日の射す犀川のはとりに目を見やっていたのである。すると如来堂の南の方から紫雲がたなびいているのが見えるのである。不思議に思つてそこに行つて見ると粗末な小屋に二人のうら若い旅の尼僧がいるではないか、しかもその一人は病でもはや命旦夕に迫っている様子、その事情を聞くと武蔵の

国熊谷直実の娘だと言う。蓮生ははっと胸がつぶれ、言葉も出ず、やつれたわが娘の姿を見ては涙を流すばかりだった。この蓮生のありさまを見た玉鶴は苦しい息の下から「御僧は若しや父上ではありませんか。私はもはや臨終に近い身、娘玉鶴と一ことだけでもおっしゃって下さい」とせがむのだ。蓮生とてその生を明かす思いにかられる。若しこのまま息を引きとれば千載に悔いを残すは必至である。一旦恩愛の絆を絶ちきってしまった今、何で父子の縁をなおり合えよう。

「愚僧はさような者ではない。熊谷殿とは京に於て法然上人の弟子であつたとき同行のよしみであつた。今は諸国をまわつて修行なされておる。今度会つたら必ずそのことをお伝えしよう。法然上人は、紫雲たなびく所、必ず大往生あり」と教えられたが、私も今日、如来堂でおつとめを終るところに紫雲がたなびくのを見た。必ず聖衆の来迎があり、必得往生は疑いない」となぐさめ、侍女

皓月尼とともに念仏をお称えする間に、娘妙蓮尼は往生をとげた。

時に文治四年（一一八八）七月五日の暁方のことであつた。

蓮生は玉鶴を市村に葬り、塚を築き、墓の印に櫛を植えた。そしてその東、数町のところに庵を結び姫の菩提を弔つた。これが今の姫塚であり、熊谷山仏導寺である。

ここに於ける蓮生は一の谷の直実の如く並ぶものなき武将でもなく、法然上人の弟子になつた「浄土にもごうのものとやさたすらむ」と言うように、信心堅固の念仏行者でもない。ひたすら往生を願う一行者として、善光寺とともにあつかわれているのである。そしてその対称は、むしろ娘であつて蓮生ではない。そしてその骨子は、人生を生きてゆくたくましさよりも、後生を願う姿をしずかに題材にしている。あたかもそれが善光寺のほんとうの姿のように。

〈随想〉

ほとけとの出会い (十三)

佐さ 竹たけ 隆りゅう 三ぞう

(大正大学教授・医博)



わたくしたちが煩悩を断じていない限りは、過去に起こした煩悩も未来に起こすであろうと思われる煩悩も、「得」の糸で現在の自己に結合されているのであります。それで現に煩悩を起こしていない時でも、「煩悩を断じている」とは言えないといわねばならないでしょう。

有部の三世実有の主張は、現在の存在根拠として、過去だけでは不充分であるという認識に立脚していると思われるので、この問題は、サーンキヤ学派 (Sankhya 数論) の転変説 (Parinamavada) と比較して考える必要があるのではないのでしょうか。

サーンキヤ学派の転変説によれば、過去に「未分

化」の状態にあったものが、分化して現在の存在になったと理解され、そしてさらにこれら転変して、未来の存在に移ってゆくと説くのであります。したがって、この説では、現在を成立させる因子はすべて過去世に用意されていたことになるわけで、決定論あるいは宿命論に陥る危険性があると言わねばならないでしょう。

そして、未来の創造的な活動を説明するための充分な論拠を持たないように思われます。有部が現在の成立根拠を未来に求めたのは、このような理由によるのではないのでしょうか。

自己の生命は遺伝生物学的には両親から与えられ

たものであり、そこには曾祖父母・祖父母・父母から自己への連続があると言わねばなりません。さらに生まれてからは自然環境・家庭環境などの中で次第に人間らしく成長してゆきます。しかし、「個人」(人間的個)とは何かといえ、単に遺伝されたものの展開にとどまるのでなく、生後に獲得されたもの、学習されたものによって個性的な存在となると思います。

自己の「生」とは明確にはきめ難いのでありますが、自我意識にめざめる頃の思春期に、有機的に統一のある存在となるように思われます。

「人間的個」は環境から独立することによって「個」となるのでありますが、しかしその独立の力は、かえって環境から与えられるのであります。人間的個の成立に関して、断絶と連続の二面性が見られるのであります。

軽量部の過未無体説は、法に「体」と「用」とを分けて、用に「有」と「無」とを説くような無理な点がなく、そしてまた現在の諸法の総合的進動の上に時間を施設するのでありますから、時間が法の変

化において仮立されたものであるという点を、合理的に示しうるものであります。

その点ではまことにすぐれた説であると思うのでありますが、しかし「転変」ということが詳しく説かれていないといううらみがあります。そのためにこの点が悪く解釈されると、宿命論的な転変説に陥る危険性がないとは言えないようであります。

唯識説においては、阿頼耶識の転変を説くのでありますが、唯識説では縁起の立場から転変が、阿頼耶識と、表面上の経験との相互関係において示されており、必然論に陥らないことが明らかにされています。しかし、軽量部の説は、この点がまだ不完全であったようであります。

軽量部の三世観では、過去とは、現在がになつている過去の経験の総和以上のものではないし、さらに未来とは現在の有する可能性であり、あるいは現在もっている希望や欲望に過ぎないと言ふことができるのであります。

この説は、どうしても個人を単位にして、過去や未来を考えることになりやすく、そのために、永遠

の過去とか永劫の未来というような宗教性がどうも稀薄のようであります。しかし、それだけに合理的であると言うことができるように思われます。

アビダルマの時間論には、三世実有と見る有部の時間論と、現在有体・過未無体と見る経量部の時間論とがあります。アビダルマ仏教は十八部とも二十部とも言われておりますから、他の部派にはこれらと異なった時間論があつたであらうと思われるのでありますが、現在残っている文献からは明らかでないようであります。

ともかく時間、が、假法であるという点に、わたくしたちに、「時を超えうる」契機のあることが示されています。人間が迷っているとは何かといえは、それはわたくしたちが「時に束縛されていること」であると言いかえてもよいであります。

しからば、なぜ人間が時にしばられていのかといえは、人間に「過去の業」があり、「現在に煩惱」があるからであります。わたくしたちの煩惱のうちで最も強いものは、生存に対する執着であります。

しかし、逆に言えばこの執着があればこそ、これによって自己の生存が維持されるのであります。

ともかく、自己の生存があるから時間があるのであり、渴愛・無明が時間を作り出す根底であるところのが、仏教の考え方であると思われまゝです。したがって仏教においては、時間の問題は、「業の問題」と「煩惱の問題」とになるわけであります。

すなわち、客観的には無常力が時間の助成因となっており、主観的には業と煩惱とが時間の能産者であるということになります。したがって、時間の問題は、「業と煩惱」の研究になるわけであり、とくに「無明・渴愛の研究」が重要であります。

深層心理学とくにソンディの「衝動心理学」、「衝動病理学」を専攻するわたくしにとつて、このように考えますと、「仏教の時間論」からもっと学ばなければならぬし、とくに「業」、「煩惱」、「無明」、「渴愛」の意義を正しく理解することが何よりも大切であるように思われます。

「時間を超える」ということは「業や煩惱の滅」を意味するのでありますから、仏陀においてそのことが明瞭に示されている筈であります。

しかし、仏陀といえども「無常の力」の埒外にあることはできず、彼は八十歳のよわいをかさね、一老比丘となつてこの世を去つたのであります。それ故に、無常としての時間は、仏陀といえども避けることはできなかったのであります。そのことはならあやしむに足らないでしょう。

しかしながら、業・煩惱を滅した釈尊には、業・煩惱から起こる時間は、当然のことながら、存在しなかつたのであります。同時に、無常としての時間は彼に存在したのでありますが、しかしそれに束縛されることはなかつたのであります。

仏陀の制定した戒律の中にも、時に関係するものが多いようであります。

第一に、捨墮法に「受蓄金銀戒」があります。これは、金銀錢を受けてはいけないという戒であります。が、「未来に束縛されない」ためであると思われまゝ。所持する金銀錢を受ければ、それだけ長い未来

の生活の安定が保証されるわけで、金銀は実に「生活的时间」であります。したがつて金銀を貰ふことは、未来の生存を予想しているのであり、いわば「未来の生存に執着している」ことになります。

自己の住処を持たないで、一処不住の生活をするのが、出家者の住の生活規範であつたし、禪宗の雲水は「行雲流水」の生活を理想としてゐるのは、「生存への執着を離れる」ところに涅槃への悟入がある」からでありましょう。

「無所有」の生活が原始仏教の理想とするところでありますが、その意味を時間論の側面から解釈することができると思ひます。

原始仏教の理想は、過去にも、未来にも、束縛されず、しかも現在にも執着しない自由自在の境地であつたと思われまゝ。

しかし、今日このような理想を貫くことは、はたして可能でしょうか。良寛や俳人山頭火のような生活を送ることは、憧憬として夢みることはできて、現実にはほとんど不可能にちかひのではありません。か。

(つづく)

◆◆◆青少年教育の原点◆◆◆

青少年に感動の生活体験を!!



石井 俊恭
いし い しゅん きょう

(東山中・高等学校長)

る。

孤立的独善的な世界観は、二十一世紀の世界人・地球人として存在しなくては、地球人類が破滅してゆくであろう未来像の中で否定されなければならないと思う。

人間性への目覚めが強く期待される。

地球人・世界人として自立し、人道的思想背景のもと、情感情緒の安定した日本人の育成が要望される。日本のよき風土歴史の上に立脚した地球人である。

やがて迎える二十一世紀にその活躍期をもつ現在の青少年はいかなる人間像をめざすべきであろうか。一地域同一民族の歴史風土の中で我々は独特の思想と文化をもつ人間を形成して来た。情緒的哲学的な豊かな人間性と、科学的物象的な創造業績を顕著につくりあげて来た。然し、科学的物象的な発展は「もの」の価値観のかさにのみ青少年を引きつけ、その表裏をなしている情緒哲学的人間性の豊かさを見失うような姿ともなってい

新聞報道等により学校内暴力、家庭内暴力が話題となり世人の耳目を引いている。私の勤務している学園には報道されているような暴力行為はないが、深い関心を持っている。何故ならば、時代にやむ青少年はこのような暴力行為に走るであろう萌芽というか、素地というかを持っているからである。

青少年が人生目的目標を明確に持ち得ないであろう現在の社会、社会機構の複雑化と同時に単純化という二律背反的構造、野望を実現し難い社会、あかるい希望の実現可能性が乏しい社会、このことは、やるせない、無責任、無感動、無気力、非体力等の青少年の実態となって表われてくる。

青少年の非行行為の数は、昭和三十九年頃のピークを最近は超え、その内容、数ともに増加していることは既によく知られている。しかも低年化しつつある現状が憂慮される。非行行為は窃盗、自動車窃盗、不純異性交友、覚醒剤使用などのいわば享樂的逃避的な遊び型から、学校内における教師に対する暴力行為、家庭内の父や母等に対する暴力行為、暴走族としての自動車（單車も含めて）の暴走という攻撃的、秩序権威を無視し破壊

するという型に拡がっている。これは青少年がいきいてる社会の動態と大きな係り合いをもっていることに気付くのである。何事も肯定と否定の両面交叉によって生成されてゆくが、否定だけを強調し、自説だけ正しいとする独善的否定論法が青少年の生活行動のなかで増幅されていると思う。不確実性をもつ社会への青少年の不安、無期待もあろうが、教育のひずみも指摘しなければならぬ。

高等学校生徒の中途退学及び原級留置者の数は昭和四十三年入学者約百三十三万人のうち、二年になる時に一・五％に当る約二万人、三年になる時に一〇％に当る約一万三千人と全国的統計が示している。そして九年後の昭和五十二年入学者、百四十九万人について見ると、二年に進級できなかった者が四〇％約五十九万人、更に三年の時には一・九％約二万七千人と高等学校教育に適応し得ない生徒数の増加が見られる。この不適応生徒の大多数は職業科の生徒であるが、普通科生徒の率が最近増加している。東京都公立高校生の中途退学者の率は昭和五十年一・三％、五十四年一・八％であり、その内訳として普通科生徒は五十年で全中退者の二三％であったのが

五十四年では三四%と増えている。このことは職業科入
学が生徒自身の志望から離れての進学指導にあつたから
ばかりでなく、高校教育になじまない者の存在を知る。

然らば斯かる落ちこぼし生徒に対応するには、「みんなに
分る授業」しかないのであるが、九四%高校進学状態の中
での少くとも非義務教育の本質論からの問題提起がされよう。

中教審の答申を踏まえての指導要領変更、教育課程変更を
みて、ほぼ十年周期の振りこの振りの様相を見る。大学高等
教育への振り、中高教育の実状への振り、返しの揺れ動きを
感じさせる。多様化的とらえ方として、方向づけも出てくる。
人間の個々の能力差を無視し画一的な能力を基準におかざる
を得ない現在の知能力評価から来るひずみにその原因を見出す
こともできよう。集団学習指導を行い、評定をする現在のあり
ようを論じるよりも、斯る競争社会の実態を青少年に認識させ
切磋琢磨する学習態度を体験させるべきと思う。お互いに競い
ながら、お互いを助け合いつつ各々の目指す光りを追求し
ゆく姿が要請される。

また少年の一般的平均線からの脱落については、教

え、指導する教師側の責任を問われるのは当然である。
言い逃れの言辭は自らの責任回避であり、自己欺瞞でもある。
自らの責任を棚上げし他にその責任を負わす悪癖がある。
無責任教師の許でどうして責任感のある青少年が育成される
であろうか。虚理空論で実践の伴わない批評家的教師の指導
能力の限界は目に見えている。

現在の青少年の幼年期を振り返ってみると親の過保護が
拡大視されてくる。もっとも親として自らの愛し子を愛さない
親はない筈である。唯々可愛い可愛い育てて来た傾向があり
はしないか。子供に甘えの姿を与え過ぎはしなかったか。
青少年は倒れ方を知らない。自ら努力し自らの手足で行動して
いないから倒れる時、自らを防禦する術を知らない。「鼻を打
って倒れる」の類である。子供同志の喧嘩を見てもお互いに
引き際を知らない。相手がぶつ倒れる迄喧嘩するの類でもある。
自主的判断力、自立性、そして自らの力で未来を拓いてゆく創造
的意欲体力の乏しさが目立っている。

このような状態で中学校を経て高校一年位になると、
今度は親が少年より逃避しようとする。誠に身勝手と言う
他ないと思う。

先達でもある生徒と話している中で、「父親の存在が失せた、なくなつた」と語つた。この生徒には母親の存在は既に消えており唯、残つていた父親さえも消え失せようとする姿に焦燥と絶望と空しさを見ることができよう。「何も失せていない。今迄のように君に密着した親ではなく、君の自立のため少し離れたところにその居場所を移しただけ」と例え話を交えて話したことがあつた。少年はその発達過程のなかで親離れをしようとする。そして親が子離れをしなければならぬ時期がある。この時期を見失ふと少年は不幸である。

遅く英知に満ち人間性情感に溢れた人間に育つてゆくのが、今、時代にやむ青少年である。感動の生活体験を実際に体験できる青少年が数多くありたいものである。今年の春、東山高校野球部は高校野球の夢、あこがれの甲子園原頭で試合し、汗と泥として自らの総力を振りしぼり爽やかな戦いをする機会をもつことができた。そして勝つた。熱戦の余燼の残るセンターポールに校旗があがる。校歌を声たかく唱う。感動の生活体験である。応援してくれる声が、ブラスバンドの音が、バッターボックスで、守備位置で聞かれ、如何に自分を励ま

してくれたかを語る選手の眼には感謝の涙が光つていた。応援する者も無心にただ一途に応援する。そこには何ものにも換え難い友情と感激がある。この体験も尊い。また、わが卓球部は春の選抜卓球大会において全国優勝を果たした。この部は昨年インターハイ連続三十回の偉業を達成し、昨年の国民体育大会少年の部でも優勝している。感動の生活体験である。この感動体験をする前提には如何に厳しい練習と精進があつたことか。勤修してすなわち真に至ろうとする姿そのものである。

自らを錬磨してゆくには自らの甘えに打ちかたねばならない。克己であり自分自身へのたたかいでもある。自分を大切にするためには自分以外のものの尊敬を十分に認め識らねばならない。自己陶醉から離れねばならない。自分自身への孤独なたたかいでもある。自立への旅立ちの姿でもある。慈悲のこころをもつ人間への歩みともなる。温かい人間社会を構成してゆく礎石をこの地球のどこかに据えつけることともなる。

ともかく、青少年を取り囲むあらゆるものが自らを内省し、「これでいいのか」と自省する謙虚さが欲しいものである。



東西地獄絵図考

福島瑞江

人は死後の安心を欣求し、永遠の生命を信じてこそ真に救われる。

これが洋の東西、すなわち仏教的世界観においても、キリスト教的世界観においても、たとえ形、教えの相違はあれ本質的には変らない宗教の根本義であるなどとは今更ここで事改めて述べたてゝるまでもないことだ。この世で善行を積んだものはお浄土へまた天国へ迎えられ、悪業を重ねたうえ、懺悔をしなかったものは、どちらも地獄へ落ちるのである。

そして東も西も、古くからすぐれた芸術家たちが競っ

てこの様子を具象化してきた。このようなイメージは今日ではその説教としての本質を超えて、より高度な芸術作品、人類の文化遺産として結晶し私たちを二重に啓蒙してくれる。日本には、平安時代からのさまざまな来迎図や極楽曼荼羅がある。ヨーロッパでも、天国を描いて、とくに有名なのはスペインのトレドにあるエル・グレコの「オルテガ伯の埋葬」であろう。こうしたお浄土や天国の様子は、美しい花々や妙なる楽の音に満ちた、まことに魂の平安と安息に相応しいところとして、観るものの心に素直に受けとめられる。ところで地獄の方は



—フランス南西部にあるアルビー大聖堂の
祭壇画（フレスコ）—

どうであろうか。日本の地獄と西洋の地獄とは、どこか様子が違うのではあるまいか。

そもそも地獄とは梵語の *naraka* で日本語で書けば奈落、「地下の牢獄」の意味だと聞いている。幼いころ大人の話す奈落の底とか奈落到落ちるといった言葉に、何やら真暗い恐ろしいところで、そこへ落ちてもしょうものなら、もう決して浮かび上ってはこれられないところだと畏怖したものだ。それもそのはず、奈落つまり地獄とは、六道の一つで六道の最下層にあり、閻魔大王が亡者の生前の罪を審判し、獄卒の鬼に命じて刑罰を加えるという。その上これが一箇所だけではなくて、八熱地獄・八大地獄、つまり等活・黒繩・衆合・叫喚・大叫喚・焦熱・大焦熱・無間（阿鼻）の八つに分かれ、さらにこれらの地獄には十六の別所（小地獄）があり、都合一三六の地獄があるとされている。

ご承知のように源信僧都の残された『往生要集』をひもとくと、この沢山の地獄の一つ一つで罪人たちにどんな刑罰がほどこされるかが、実にリアルに綿密に描写されていて、読む者をして洩め息を洩らさざるばかりである。これでもかこれでもかと、微に入り細にわたるその

執拗なまでの叙述に、この原典となった数々の經典を縦横に駆使された僧都の博覧強氣に感服するのはもとより、改めて「欣求浄土」に至るまでの「厭離穢土」の並々ならぬものを悟るのである。

そして、この叙述に則った地獄の状況、いやむしろ凄絶なる景観が、やがて六道絵の一つ、地獄絵図、あるいは地獄草紙として、これまたわが国の美術史上を飾ることになるのだ。だから日本の地獄絵図には、思わずぞっとするような臨場感がある。聖衆来迎寺の黒縄地獄の絵では、実際に罪人は熱鉄の縄で墨を打たれ、その墨縄に従って切り裂かれているさまが描かれているのではない。また地獄草紙にしても、どういふ罪人がこの地獄で押しおきにあっているかが詳しく知られるのだ。

ひるがえって西洋の絵画を見ると、このように身体を鋸でひかれたり、鉄炎に乗せられて焼かれたりするものは、むしろ古い殉教者の絵に多い。それだけに、信仰がより厳しさを求められていたのであろう。そして、地獄を単独に描いた絵には、余りお目にかからないような気がする。もちろん中世にはそのような図柄も多かったに違いない。しかし、何よりもキリスト教では、大方地獄

が「最後の審判」の一部として描かれているからである。

この最後の審判の模様については、『マタイ福音書』二六の一七—二九に次のように記されている。

「人の子は、その栄光のうちに、多くの天使をひきつけてきて、光榮の座につくであらう。そして、諸国の人々を前に集め、ちやうど牧者が羊と牡山羊を分けるように、羊を右に、牡山羊を左におくだろう。その時王は、右にいる人々に向って、『私の父に祝せられた者よ、来て、世のはじめからあなたたちのために準備されていた国をうけよ。』……また王は左にいる人々に向って、『のろわれた者よ、私をはなれて、悪魔とその使たちのために準備された永遠の火に入れ。』……」

このキリストの言葉から、ヨーロッパの教会の祭壇画には、王たるキリストを中心に向って左側に天国が、右側に地獄が描かれている。その代表的なものとして、ヴァチカン宮殿のシステイーナ礼拝堂を飾るミケランジェロの壁画があげられよう。中央のキリストその傍らに執

り成しを願う聖母マリヤが座し、左側には復活して昇天を赦される義人たちが描かれ、右下の方にはアケロンの河を渡って冥王ミノスのもとに行く罪人たちが描かれている。キリストの足もとで、何人かの天使が唳々と吹き

鳴らすトランペットの響きが、あたかも聞こえてくるようである。それでも、ここでは折り重って堕ちてゆく罪人たちが、苦しみの罪を受けるさままでは描かれていない。



— 浄土宗太宗寺（東京・新宿）所蔵の十王経図 —

ところで、最近わが国でもしばしば話題に上るようになったヒエロニムス・ボツシュの場合は、また別である。いろいろと謎に包まれたこのベルギーの画家は、三幅対のパネルによく地獄の不思議な幻想を描いているからだ。三幅対というのはカトリック教会の伝統的な祭壇画である。閉じられた二枚の扉を左右にひらくと、左から天国・現世・地獄の三つの画面が現れる。この画家が二・三世紀の北アフリカに起源をもつアダム教の流れを組む秘密宗派に属していたとか、至福千年説を具現したものであるという、さまざまな解釈、批評などは一切無視して、直截にその地獄の図を見るなら、何人ともおぞましい異形のものゝ集団に誰しも驚異を感じるに違いない。ミュンヘンのアルテ・ピナコテークの黒ずんだ中に鈍い光を放つ最後の審判の部分や、マドリッドのブラダ美術館にある、これとは打って変わった明るい色調の三幅対「楽園」の右パネルにしても、奇怪な形をした一人間、化物、動物、また物までが、一つの集団となって見るものに迫ってくるのだ。とくに後者の通称「楽器の地獄」と呼ばれる部分には、人がハーブやリュートに突き刺され、磔にされている。つまりこの世で使っていたも

のたちにまで、逆に人間が復讐されているのである。また同じブラダ美術館にある「乾草車」の三幅対も人間そのものへの直視を強要するような、無言の提言がなされている。かつてスペイン人の神父は「彼(ボツシュ)は人間の外見を描くよりも内面を大胆に描いて見せた」と言った。まことにこれらの絵は単なる地獄絵図——「乾草車」の地獄には、音楽家賭博師、尼僧、僧侶、騎士らが槍に刺され、火にくべられたりしている——ではなくして、五百年の歳月を超え、独特の諷刺画として現代人を圧倒する。

さて、このような特異な画家は別として、私が一番日本の地獄絵図に近いと思つて感心したものが、フランスの南西部の小都市アルビーの大聖堂を飾る祭壇のフレスコ画である。ここは、現在ではコンコルドの生産で名高い、古くからの大学都市トゥールーズから北東へ車で小一時間ほどの品のいい町だ。画家のトゥールーズ・ドゥ・ロートレック伯が生まれた町でもある。このアルビーには、町の砦の一部をなしている大聖堂が建っていて、そのバラ色のレンガの建物は、うずくまるように座つて頭をもたげた牝ライオンの姿に譬えられている。

ところで、この大聖堂の中へ一歩足を踏み入れた私は、思わず息を呑んだものだ。なんとその祭壇には、紺青の他に白く裸体の婦人僧が列をなしているではないか。その生々しい姿がいきなり鮮明な映像で目に飛びこんできたのだ。神の殿堂であるはずの大聖堂に、これは全く異なる、なまめかしい雰囲気をかもし出している。しかし気を落ちつけ、静かに内陣へと近づいて正面からよく見ると、これは紛れもない最後の審判の図であった。中央にはキリストが座し、その左右に聖母マリアと聖ヨハネと覚しき聖人が膝まずき、面白いことにキリストの足もとには、閻魔さまならぬ天使ミカエルが秤をもつて罪人の罪の重さを計っている。先ほど裸体の女人像と見間違えた部分は、生命の書つまり善行と悪業の履歴書を胸に当てて、復活し天国へと召されてゆく善人たちであった。そして右側には、やはり生命の書を胸に地獄へ落されようとして、嘆きもだえる大勢の罪人たちの姿が描かれている。さらにこの大きな画面の下は七つに仕切られて、そこには七つの罪状に分けられた大罪人たちが、ひどい責苦にあっているさまが描き分けられている。これこそまさに、西洋地獄絵図であらう。

嬌慢、貪欲、邪淫、瞋恚、貪食、嫉妬、懈怠、これがカトリックの言う七つの大罪である。今ここに描かれたその責苦の模様を詳しく書く余裕はないが、それぞれの罪状によって例えば山の中腹で車輪にくくりつけられ、ぐるぐる廻されていたり、あるいは氷の河に漬けられたり、真暗な地下室で悪魔に切り刻まれたりされている。

この壁面の描かれたのは十五世紀、ルイ十一世の治下であり、時あたかもルネッサンスの時代、この後に、前出のミケランジェロの作品がその総決算として開花することになる。このアルビーの地獄絵図のもつ、中世の宗教思想の残映について私はつまびらかではない。しかし、永らく香の煙にいぶされ黒ずんで定かではなかったこの壁画は、第二次大戦後にその修復が完成して、いみじくも今日再び地獄の相を表わにしたのだ。

今こうして、日本とヨーロッパの地獄絵図と比較してみたが、それはどちらも人々を罰するためではなく、究極として私たちを善へと向かわしめる一つの手立てだと思われる。すなわち、先にも述べた「厭離穢土」を通じての「欣求浄土」なのである。

安居の俳句日誌

わたなべとすい
渡辺杜水(西山浄土宗深草派
大本山円福寺法主)

浄土門念仏宗では俗に加行(けぎょう)と呼び宗侶の沙弥沙弥尼に伝法伝戒の修行あり。宗脈戒脈の相伝相承という。本来は寒中の行であったのが、学校の夏期休暇を利用するところから近來、わが宗(西山浄土宗)においても七月末から八月にかけて十日間の行事となり、当大本山において毎年、加行を実施している。俳句の季題としての安居とは少し趣きを異にする向きもあるが、季語を尊重して安居俳句日誌を作ってみた。これは昨年のものである。

×

×

×

×

浄土宗
西山深草派
伝燈沙門 一空
杜水試作

一掃除二経三学安居律
廊伝ふ起床太鼓や明易し

注連張りて安居の庫裡の水行場

水行の手桶並べり大簾

沐浴偈唱へ夏行の水かぶる

五祖の画像揺るる涼しさ安居堂

夏安居の老能化たり坐して説く

糞掃衣ともいう安居の麻衣

夏安居の所化頭(すこ)を剃らず胡坐せり

沙弥沙弥尼卷物写す筆の汗

しめ縄の弊の涼しき写経坊

上堂の錫杖鳴りて廊涼し

明け放つ行堂慈雨の風あはつ

食坐の析(き)打ちて夏断や五観の偈

冷麵の音たてて経忘れたり

供物下げわかつお非時の水羊羹

夏草をひく老所化の昼休み

明易き灯に伝法す喜寿のわれ

短か夜の一燈喜寿の伝戒僧

伝法の「明来暗去」雷光る

解夏の朝百拝五体投地の礼

満行の縁に羽化せる夏の蝶

般若湯注ぎて夏病み除けという
満行の香色袈裟や安居僧

注 能化、所化とは伝法教化する人と、される受者のこと。行堂（ぎょうどう）行僧（ぎょうそう）満行（まんぎょう）と読む。修行、加行の行である。明来暗去とは深夜の伝法行事に点灯のとき（明来暗去、暗去明来）の説明す。この明暗は悟と迷に譬う。

◇◇◇ “浄土句集” 欄への投句のお願い

— 及び俳文等の寄稿のお願い ◇◇◇

“浄土句集” 欄へのご投句を心からお願い申し上げます。また重ねて俳文や句会便り、あるいは俳句にまつわる折々の随想をご投稿していただければ幸いです。

左記要領で、くれぐれも宜しくお願いします。

- 一、内 容 俳文、句会便り等の随想
- 一、枚 数 四百字詰用紙八枚半程度
- 一、締 切 毎月五日

法然上人鑽仰会

往生を願う



よし だ ゆうのすけ
吉 田 勇之助

死はいかに恐れ忌み嫌ってもいつか対面しなければならぬ。宇宙的大生命ともいうべき生命の流れに浮かび出ている「うたかた」のような私も、死の訪れとともに消え、もとの流れに、生まれ出てきたところに、戻っていくようなものと受けとっている。

我々は此の世に生を受けたのであるから、死を避けることは出来ない。生れた瞬間から死に向って歩るき出しているのだ。

死を見つめる時に、暗い底深い穴を見入る思いがする。それは時間を超え、次元の異なる、知り得ぬ死後の世界がもたらす恐怖があるからだ。

死によって生命現象は停止してしまふ。肉体を形成していた諸器官は分解され、もとの大自然に帰えってしまふ。集まっている人間の細胞はみなちりちりばらばらになってしまふ。誠に儚いものだ。

私はよく物ごとにこだわる。よい性格とは言えない。私が永くこだわり凝視し続けているのは「死」についてである。遠い昔の青春の頃、大学生時代からであるか

ら、六十年ぐらいこたわっていることになろう。私は一日も死を考えない日はない。

釈尊は、人間は死後も存在するのかどうか等々の哲学的課題を提起した弟子に対して、

「そのような問題に答えたとして、われわれの苦なる人生の解決にはなり得ない、この現在の生において、苦の人生を克服するためには、説かないことは説かないままに受持し、説いたことは説いたままに受持するがよい……」

と教えられ、戯論をいましめられておられる。

『スッタニパータ』の中に、釈尊が尊者達に請われて夫々へ御解答されたものがある。

その中にこうある。

(一一一九)「つねによく気をつけ、自己に固執する見解をうち破って、世界を空なりと観ぜよ、そうすれば死をわたることができるであらう。このように世界を観ずる人を死王は見ることがない。」

(一一二〇)「……ひとびとは愛執に陥って苦悩を生じ、老いに襲われているのを見ているのだから、それ故に、ピンギヤよ、汝は怠ることなく愛執を捨て、再び生存状態に至らないようにせよ」

(中村元訳・岩波文庫本より)

法然上人は、死期が近づいた時、門弟の質問に対して、「われもと極楽にありし身なればさだめしかへりゆくべし」と、浄土がご自分のふるさとであり、魂のふるさとである旨、答えておられる。そして、このどうにもしようのない暗い死というものに対して「往生」というあかるい世界に往いて生れるよろこび、即ち死後は極楽世界に、無限に輝く世界に往いて生れることを教えられたのだ。

この往生極楽という願いを達成するには「南無阿弥陀仏と申して疑ひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の仔細候はず……智者のふるまひをせず只一向に念仏すべし」と、「一枚起請文」の中で念仏を唱えることを強調して説いておられる。

死後は科学的に知ることの不可能な世界である。有ると考える人、全く無いと考える人、考えてもわからないから考えないことにしている人等、それは様々である。これは主観的問題なのだから、宗教的に取り組んでいくものだと思う。

生に対する飽くなき執着を断ち、万物をしてかくあらしめている宇宙の真理というか、命の流れに自分のすべてを委せきるところに救いが感ぜられるのではなからうか。

上人の御教えを信じ、念仏しつつ次第に導かれていくときに死の恐怖の囚われからるときほどかれるのではなからうか。

命は有限にして儚いものであることが深く感ぜられるにつけ、生死の囚われから一日も早く離れたい。信仰の問題は理屈で割りきることは出来ない。信じ、心の拠所としてしっかり保ち、育てていく以外に救いは無いと思っている。

ところが、念仏の中に生きようと務めながらいつのまにか煩惱が起き、雑念が出てきてうろろうしてしまふ。素直さに欠けている故だ。これが今の私である。

◎ハガキ印刷や案内状等、小物印刷にご利用下さい。ご寺院関係の皆様にも、とくにご紹介します。

◆ 阿島印刷有限公司 ◆

〒164 中野区弥生町五―八―十六
TEL (03) 三八二―一〇三二

|| 新刊 ||

△ 幼児用▽ 教育えほん

『ほ う ね ん さ ま』

B5判、表紙共一二ページ (カラー刷)
定価三〇〇円 (送料実費)

申込先――

〒102 東京都千代田区飯田橋一―十一―六
大 道 社

浄土句集

一田牛畝選

よろこびに輝いていることか。

何となく春の匂いや黒き土
東京 鈴木 葉子

福岡 原 敬二郎
曼鋸と百寿の春を祝ふ医師

評 医者の不養生、坊主の無信心とは昔か

らの諺であるが、百歳迄生きて尚曼鋸として医師をつとめているとは珍らしい。嗚ぞかし養生第一で立派な医師ならん。

福岡 濡石すな女
始皇帽の僧の十念法然忌

評 始皇帽を冠って居れば顔も判り難いのであらうが嗚ぞかし名僧らしい。その僧が御忌衆に十念を授与している。みな頭を垂れて掌を合せお念仏を称えている。

福岡 荒牧 還愚
春愁や教え子吾より先立ちし

評 教え子だから、逆縁の仏で、頼りにしていた人に先立たれた淋しさ如何ばかり。順縁の仏なれば仏前に焼香し、御回向後遺族への挨拶も述べ易いのに。

福岡 上滝津弥音
起請文のところに念仏法然忌

評 一枚起請文のさとしは「仮令一代の法をよくよく学すとも一文不知の愚鈍の身になして」で、その心になって御忌衆が念仏申しているのである。

東京 新井 新生
昇殿す合格秘めて梅の宮

評 合格の発表を知って何はさておき祈願の文の宮にお礼詣で、嗚ぞかしその顔は

評 黒い土と言ったことが、肥えた土と感じられる。その土はきつと春の匂がして希望を与えるようで嬉しい限りである。

東京 栗原とも子
千代紙の折皿に盛る雛あられ

評 千代紙の折皿にあられが盛られているのを、子供達に取りまいて甘酒をよばれている。その景は微笑しいことである。

福岡 服部 光代
起きぬけの庭に初音と思いきく

三重 森 静枝
御忌法座参るつもり春の舞

— 30 —

京都 安藤 寛
念仏しつ甘茶を炊ける僧の妻

群馬 島津 か寿
強東風やつ、からませて杉揺るる

山形 松田 允子
囀や子ら胸張って登校す

福岡 安藤平次郎
地に低く白蝶又つもつれ去る

福岡 高良 幸代
お隣の転宅荷物花の雨

福岡 荒牧 高齡
手の届くところに眼鏡春の風邪

大分 丹羽 難中
白象を背にして花の稚児写真

三重 山田 うた
鐘が鳴る暮れる境内落椿

福岡 林 澄山
熱々の飴湯を飲むも春の風邪

福岡 権藤みきを
掘りたての笥提げて末寺より

東京 田中 秀代
梅の香の匂ひ来るなり女坂

福岡 行正 明弘
藤房の頭にふるる女人坂

東京 猪瀬 幸子
合す掌に梅の香ほのと匂ひ来る

東京 小笠原香祥
高垣に梅の匂へる男坂

福岡 前田 秀峰
赤袈裟の稚児も随喜の鎮西忌

東京 鳥居 千代
老梅の咲き初め古き門構

東京 真野よし子
白梅の清楚と咲きゐる神の庭

福岡 阪本 宏子
一山の遺跡たづねて花の礎

東京 吉原登起子
天神の絵馬ひしめきて梅の雨

東京 阪入志津枝
独り居の刻を楽しみ雛飾る

福岡 藤村八千代
多く聴き小さく語り老の春

福岡 高良 慈風
お土産のこれは何より八女新茶

東京 原 登起子
ずっしりと絵重なりて梅の宮

一田 牛畝
死囚等に父と呼ばれて盆の僧

表紙のことば

「たなばた」

土屋 正男

星は人間よりも前から夜空にまたたいいていた。はじめ、星を仰いで人は道しるべとした。火を発見して灯りを知り一隅を照らしていた照明というものが発達してどんどん人の欲望とともに光度を高め、現在のように昼も欺く程日常身辺が明るさに満されてしまうと、逆にそれに狎れた眼は闇を視透す視力を弱めてしまふのではないかと疑われる。雨降りの真の暗闇み道で進退きわまつた経験があるからである。一昔前まで人は夜目を視透す眼を持つ

ていた。

身辺から夜がなくなると夜空を仰いで星をみることも忘れてしまふ。電灯が星の光りを掻き消してしまふからだ。星の光は何億光年の元初のままのまたたきを更えてはいない。昔人はその渺茫たる星空を仰いで熊、蛇、さそり、てんびんなど諸々の形を画いて豊かに想像をひろげることができた。

——大空に流れている天の川の東の織女星は明けても暮れても只管^{ひたすら}動かして機を織

っていた。天帝が可哀そうに思つて西の牽牛星と婚せてやった。彼女はすっかり牽牛との生活の明るさ楽しさに酔つて機を織ることを忘れてしまったので天帝の怒りにふれて仲を割かれてしまい、年にただ一度、七月七日の夜にだけ会うことを許されたが、若しその夜が雨だったら天の川の水嵩が増して会うことが出来ない。その悲しさいじらしさを見かねて鳥鵲カササギがかけ橋となつて織女を東から西へ渡

してやっているのだという——。
この七夕の伝説に因んで七月七日の夜には笹竹をたてて色紙短冊を結びつけ、瓜や茄子を供えて今でも星を祭っている。
社会の営みが日ごとに気急わしくなつて、ぎらぎら眩しい光と光がせめぎあつて人の心も刺げとげしくなっている世の中で、だからこそせめてこのようなやさしい行事は長く残つて欲しいものだと思ふのだが……。

◎『浄土』表紙版画販売についてのご案内

好評の『浄土』誌表紙版画は、土屋正男先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節観に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一—二—六

法 然 上 人 鑽 仰 会 振 替 (東京) 八—八—二—八—七



（読）
（者）
（の）
（べ）
（い）
（じ）

生 類 愛

対岸の火事を見て、なまじ同情するのは建前で、本音は単純に面白がるにあり、現代はその本音時代だと申します。

処がその火は、手前（自分）の家が燃え、向うの河水に映っているのに。

何はともあれ、火と見たら消す事です。論争などしている場合ではありません。

その消火には「世界核戦後風景を想像してみましよう。人類が同志打して全滅するだけでしたら、自業自得。然しそれでは、これ迄



合 田 微 雪
ごう だ び せつ

（山口県防府市在住）

我々が生きる為に多大な恩恵を受けてきた、他の全生類まで巻添えにし、天帝に申訳が立ちませぬ」という反省による「全生類愛」こそ、最大最適の方法と存じます。

建前へ接近しようとの努力精進によって披歴される、本音の深奥に厳存する本（良）心は、宗教、倫理等を弁えた人間だけの愛から滲み出で、かつ迸ります。

核兵器製造中の国々にしても、自分から好んで行っているではありませんまい。世界中



おおかたの人間が「戦争は嫌だ」という口の下から、血生臭い争闘等に有頂天になり、その勝利者を無条件畏敬していますから。

考えてみましょう。暴力とは、義と理に負けた人間のとる、他動物の模倣行為。いわゆる英雄豪傑は心臓が太いどころか、はなから空洞。人間が人間独特な社会生活に順応するために、努力精進しましょう。

本当の崇拜者は、乗越えたと申します。科学も長足進歩の今日、宗教も奇蹟僥倖を頼らず、人を憎み恨んだりもせぬ、ただ一人の生命をも貴重とする「大空心」を。

人類だけに恵与された智・愛・言語等を慎重にかつフルに活用しましょう。

昨日迄の哲学を奉じての「本音」と、前途を見透して叫ぶ「本心」と。

世界に、喰うか喰われるかの他動物同様な間ばかり住んではいませぬ。曾て大空詩人こと永井叔氏により日本津々浦々に広められた拙作詞曲「よい事ばかり考えよう」が、今

は指笛音楽家田村大三氏にバトンタッチ、諸外国にまで紹介されていますとか。僭越ながらこの「よい事ばかり考えよう」と、南無阿弥陀仏に添えお口誦み頂きたき心、切なるものがございます。

「原爆赦すまじ」だけでは、達成されればまた別な権力を生ぜしめます。

古の聖者による、榮職を捨てて野に下り底辺への諦観説伏は、今から見ますと権力者への助力。覇者自身はその逆行為ばかりし、自分以外すべての人間に強制してきた宗教道徳を、今こそピラミッドへ改心説諭時代。

なまじな長富者の一燈（あれは万燈に非ず）の類でなく、心から人様に尽し己が心に問い糺してみても、本当に正しいと信じる道歩んでゆけば、明治天皇御製を持出すものでもなく、いつでも満ち足りた往生が出来ます。

幾度繰返されてもイデオロギーの相違等で未解決と開く地球市民世界大会の「地球市民」という言葉を有名無実（無実でなく）にす



るには、出席者一同が赤裸々「一心同体」意識を。マザーテレサ女史も「愛は行動。家族など身近な人から愛の実践を」と。

その愛には「敵」「闘争」という言葉を避け、人と自分を区別せぬ心掛けを。半分相手に強制する「和」よりも「譲」をモットーにしましょう。

ある平凡家庭で、兄が自分の小使いを足して弟の物を買与え「だってほかの品は全然買う気がしなかったもの」と父母に報告。

自分を愛する心で
家庭を愛する心で
近隣を愛する心で
社会を愛する心で
国家を愛する心で
世界を愛する心で
自分を……

家庭を愛しよう
近隣を愛しよう
社会を愛しよう
国家を愛しよう
世界を愛しよう
自分を愛しよう
(もとに戻る)

この筆法ですれば、嫁は夫、姑は息子の為、更に家庭の為と考え及ぶ時、嫁姑間のいざこざも起りようがなくなりましょう。

などと申しましても、以上のお話はすべて小生一人の案出ではございませぬ。若しお釈迦様が法然上人が現在生きていられたら……?と想像してみましたに過ぎませぬ。

詳細な説明に就ては、経典その他のご専門諸賢にお願い申すこととし、一先ずこの拙稿を置かせて頂きます。



念佛ひじり三国志 (笑)

— 法然をゆるぐ人々 —

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

建永二年（一二〇七）正月下旬から二月へかけて京の空模様は連日晴れていたようである。ただし「明月記」によると、

——天晴レ、雪霏々

という記述がしきりと目につく。

「風花」であろう。空は晴れているが風強く、山肌から粉雪を運んでくるのである。冷気はひとしお、きびしいはずだった。

そんな「風花」が舞う朝の都大路を一頭の黒鹿毛が疾駆してゆく。折から路傍は朝市の人出でごったがえしていた。

京の「市」は、東西に二分された特定の店で商われるのが掟だった。だが東ノ市五十一戸、西ノ市三十三戸の専門店は月のうち半分だけしか開けることを許されない。それも営業時間は正午以後である。

当然、路傍にモグリの自由交易市が立った。市女（いちめ）が頭上に品々を載せて行商することは許されていたから、これを拡大解釈して頭上の籠を路傍におろし、客の需めに応ずるのである。

とりわけ朝はこの市が賑わい、下々の民ばかりでなく身分の高い貴族でも日に一度は「市を覗いて来ないと気分が晴れない」（『宇治大納言物語』）と言われたほどだ。

朝市で雑踏する人混みを駆け抜けてゆく黒鹿毛——よほど手綱さばきが確かでない事故をおこす。

「何と見事な騎りさまよ」

「それも、墨衣の阿弥陀ひじりぞ」

市の人々は驚きの目をみはって、馬上の念仏ひじりを見送っている。

頭頂を白頭巾でおおい、黒衣を着しておれば、当時の都人は誰もそれが念仏ひじりであると見分けた。

「西入どのではないか」

住蓮は大声で呼び止めた。朝市の外ずれ、そこは「市の堂」のまん前だった。

「市の堂」は空也上人の創始と言われ、京の街に点する念仏道場だ。勝手に市井の男女が集って参籠でき

る。住蓮は昨夜も六条の「堂」で一夜を明かし、これから東山の禪房へ登ろうとするとところだった。

「おお、住蓮……」

視線を結ぶと馬上のひじりは表情をなごませた。でも、なごんだ眼はじきに緊迫した光気を点じた。

「吉水にお聖人はおられるだろうな」

詰問するように訊く。

「うむ、わたしもこれからゆくところだ」

「お聖人はご無事か」

「いつものお病いのほかに、悪いとは聞かないが」

「そうか」

ほんと安堵して、ひじりは馬の背からおり立った。徒歩の住蓮とつれだってゆくつもりであろう。

並み脚になった黒鹿毛は、のどかにいない。

「さすがは西入どの。駿馬もわが手足の如くじゃのう」

心地良げについてくる黒鹿毛を見やって住蓮は感心する。

「ひじりとなった身に馬なぞは所詮、無用の長物」

苦笑するこの念仏ひじり。かつては天下第一の騎馬武者だったのである。

＜風花の舞う都大路を疾駆する黒鹿毛＞



西入——虚假阿弥陀仏とも号した。佐々木四郎高綱、晩年の姿である。

四郎高綱は宇多源氏の出自で、頼朝旗上げのみぎりには坂東にいて、北条時政ら共々に頼朝の数少ない協力者となった。石橋山の敗戦をくぐり抜けて頼朝に終生変らぬ忠誠を誓った。

平家を追放してひと足に都へはいった木曾義仲との戦いには源九郎義経の麾下で従軍した。宇治川渡河では、頼朝から拜領の駿馬「いけづき」を駆って一番乗りを果たし、天下にその名声をとどろかせている。

だが頼朝が將軍の座につくと彼は鎌倉を去った。高野山へ隠遁して世捨て人となった。建久の初めころと言われる。高野山では念仏ひじりの拠点である蓮華谷で修法をつんだ。明遍の教示を受けた。

また東山へ出向いて、法然が親しく念仏の本義を聴聞した。兼好法師はその著「徒然草」で法然のエピソードを紹介しているが、そこへ四郎高綱が登場してくる。

ある人が法然にこんな質問を發した。

——念仏ノ時、睡(ネブリ)ニオカサレテ行ヲ怠リ侍ル

事、イカガシテコノ障(サワ)リヲ止メ侍ラン

法然はこれに對して、

——目ノ醒メタランホドニ念仏シ給ヘ

と答えている。

兼好は「イト尊カリケリ」と総括して法然の人間スケールの大きさを、こだわりのない念仏を讀める。

法然の諸伝はこの「ある人」こそ佐々木四郎高綱であったとする。

ところで武勲の誉れも高い四郎高綱が、未だ働き盛りのこの時期に、どうして武家政界を捨てて出家してしまつたのであろうか。俗説は、將軍頼朝の「違約」を出家遁世の理由にあげている。

石橋山合戦の敗軍のなかで頼朝は佐々木兄弟に確約したというのである。もしもこの危機を克服して平家打倒に成功したらお前ら兄弟に日本の半分を与えようと。

だが平家打倒が成って征夷大將軍の座へ昇つたのに頼朝は日本の半国どころか、旧所領の近江に和泉と出雲を

添えた程度であった。これに憤慨し、また將軍の違約を言いふらしすぎてわが身に危険が迫ったための出家だ、とする。

いかにも面白い話だが俗説の域を脱しない。天下を取ったら日本の半国を与えろという約束など当時の武家のあいだでは時候の挨拶みたいなものだった。いわんや頼朝は鎌倉で將軍の座を占めたとはいえ、京には朝廷貴族が健在で、彼らや寺社の保有する莊園からすれば、到底この国の版図を領有したなどとは言えない実状であった。

四郎高綱出家の真相は、その後における佐々木一族の動向を追跡すれば容易に判明してくる。

「お上人の身が危い」

歩きだすと、四郎高綱はすぐにささやいてきた。お上人とは法然その人をさしている。

「うむ。南都北嶺の悪僧どもが騒いでいるという噂だが」

「いや、悪僧の沙汰どころではない。院の中樞がじきじきに手を下そうとしている」

「院が……どこからそのような話を」

住蓮は情報源を確認しておきたかった。

「僧都明遍が語っておられた」

「それならずで聞いておる。僧都からじきじきに忠告があった。お上人が都を出られるのが得策であるとな」

ひじりの長西が明遍の忠告として東山へもたらした情報であった。しかし、興福寺奏状このかた、それに類した警告は数限りなく届いていた。

「そうか、大相国や卿三位も動いていると申ししていたか」

「大相国や卿三位が……」

これは初耳であった。

大相国とは、現下京における兵杖の権をゆだねられた頼実のこと、卿三位はその妻兼子である。

二

明遍は、高野山の蓮華谷における関係で佐々木四郎高綱の師僧筋にあたっていた。出京すると必ず高綱は光堂に明遍を訪ねることにしていた。

一昨日もそこで過ごした高綱は、心の師法然にまつわ

る重大な情報を告げられた。明遍の感触では、後鳥羽院の意志は法然を死罪へ追いやる暴挙も辞さぬということだった。

「長袖や入眼のやからが申すのでは信頼できぬ」

と高綱は自身が取った行動を住蓮に打ち明けた。長袖は公卿の頼実、入眼は卿三位兼子をヤユった表現だ。

「そこで昨日、摂津に弥太郎判官を訪ねてみたわ」

「うむ、それで……」

住蓮は歩を停めて高綱を凝視した。

「弥太郎が申すには、叔父上、今どきうろろ横行されては困る。叔父上といえども黒衣のひじりは一網打尽、梟首にしないわけにはまいらぬ、とな」

ぶ気味な現実性をおびた台詞だった。

弥太郎判官——四郎高綱の次兄経高の長男高重のことである。

佐々木一族はこの数年来、完全に二分されていた。

四郎高綱には三人の兄がいた。長兄定綱は次兄の経高と組んで、ともすると三男盛綱や四男の高綱を疎外視してきた。近江や摂津和泉の領地を独占し、盛綱高綱に関与させなかった。ために盛綱はもっぱら鎌倉住まいで、

武者所の被官となった。高綱は出家してしまい、この醜い兄弟の争いから身を遠ざけた。四郎高綱が出家した動機もこのあたりにひそむ。

しかもこの兄弟離反には後鳥羽院を取りまく西北面ノ武士たちの策謀も軽視できない「磁場」となっていたのである。

この磁場は長兄で佐々木家の「氏の長者」だった定綱が他界すると、いよいよ露骨に機能しはじめた。後鳥羽院は定綱の長男広綱を検非遣使に任命し、また経高の長男高重は西面ノ武士に取り立てた。佐々木判官高重と、同じ西面ノ実力者たる尊長僧都との同志的結合はここから端緒をひらいた。

ずっと後年のことになるが、これら佐々木広綱、高重は承久ノ変で官軍の主力となる。北条執権倒伐の急先鋒だった。

すでに広綱には山城国も付与されて山城守に任ぜられ、弥太郎判官は近江を支配していた。

この官軍と戦うべく上京した鎌倉軍の先鋒に佐々木盛綱、盛季の父子がいた。同族は血みどろな干戈をまじえたのである。

ところで承久ノ変時、四郎高綱は念仏ひじりの身を堅持して圏外に立っていた。ただし、その養子である信綱が抜群の戦功をあげた。

じつはこの信綱、官軍方の総司令官山城守広綱の実弟である。幼いころ叔父の四郎高綱にもらわれてゆき、鎌倉で育った。

北条泰時に従って京畿へ攻め寄せた信綱は、宇治川のほとりへ至ると、まっ先にただ一騎濁流へ乗り入れ、叔父の四郎高綱と同様に同じ川で先陣一番乗りを果たしたのだった。

史家のなかには木曾義仲追討時の四郎高綱による「いけづき」先陣渡河は軍記物語の造作事で、承久ノ変における甥信綱をなぞったものであろう、などと臆測する人もいたが、その後にあらわれた資料で高綱、信綱の宇治川先陣はどちらも事実であったことが立証された。

それはともかく、この佐々木信綱も承久ノ変の勲功で北条政権の評定衆に加えられるが、わずか二年在籍しただけで辞してしまふ。出家して高野山の念仏ひじりとなる。叔父高綱の法名をついで彼も虚仮阿弥陀と号した。

やはり自分が勲功を得た戦いで、兄の広綱や従兄の高

重が梟首の厄に遇い、一族が敵味方にわかれて戦った残酷な運命を清算したかったにちがいない。

それにしても建永二年の法然流罪や門弟の処刑が十四年あとに突発した承久ノ変で奇妙に帳尻を合わせているのは、歴史の偶然だけであろうか。

承久ノ変で後鳥羽上皇を押し上げた京都軍の主謀者は、建永二年の専修念仏の断罪に暗躍した院直属の西門ノ武士たちだった。二位法印尊長、安楽房の首を刳ねたと伝えられる三浦秀能（法然伝という官人秀能）、また住蓮を近江の馬淵で処刑した佐々木判官（弥太郎高重）や山城守広綱らなのである。

これと戦った鎌倉軍の主力先鋒は、佐々木盛綱、信綱。さらに熊谷蓮生房の長子直家。宇都宮入道頼綱、頼業。千葉胤綱、大胡太郎などどれも法然ゆかりのひじり武士たちであった。

「われら末輩に難が及ぶのは詮方ないが、尊いお上さまに身が危いとはどういうことであろうか」

住蓮は、四郎高綱が入手したという情報をもっと追求しなかった。

「弥太郎判官の口ぶりではな、元凶は法然ただ一人、お

上人さまさえ抹殺すれば、鎌倉方は京への足がかりを失う、と考えているらしいぞ」

「鎌倉方の京への足がかりがお上人さまか」

問題は狭隘な政治の視座だけでゆがんでとらえられているようである。法然自身と鎌倉武士たちとは、そんな意味でのつながりは一切なかったのである。

あるとすれば……住蓮自身がいちまつの後ろめたさを感じないわけにはいかない。安楽房ともども布教に名をかりて東西の政治に接触しすぎたことだ。つまり、鎌倉方の京への足がかりとは、自分らのことだったのである。

それにしてもこの責任を法然上人だけにかぶせようとする意図は何なのであろうか。

「とにかく弥太郎判官如きが、おそろしく内部の事情に通じておる」

「内部の事情……」

「東山の吉水禅室へ出入りする僧俗者の身柄を細密に至るまで調べあげている。わしらの知らんことばかりだ」

「なるほど……」

「西意善禪房というひじりを知っているかな」

「会ったことはないが、噂だけは聞いている。あれはたしか松橋家の侍者で、善恵房に随従してきた男ではなかったかな。いまは摂津の在に住みついて、別時念仏で多くの男女を集めて盛んだとか」

「それだ。弥太郎判官が申すには念仏に名をかりてその善禪房、漁色をほしきままにしておるそう。何でも判官の愛妾までが奪われたということだ」

「そのように下世話な始末が何でお上人にまでかわるのであろうか」

「これはな住蓮、どうやら内部に判官らと内応しておる者がいるのではなからうか」

さすがは治承以来の乱世を生き抜いてきた佐々木四郎高綱だった。視座を鋭角にふり向けようとする。

判官とは本来、各官省の役職者の総称だった。勘解使、鑄司、修理宮城使、防鴨河使などそこに仕える役人はみな判官なのだが、近ごろでは検非違使の庁で隊長クラスになった者——尉と公式には呼ばれるが、彼らだけに限定されてしまった。

判官びい気なる言葉を生んだ源九郎義経。彼も宮廷では検非違使五位尉の役職を与えられたため九郎判官と呼

ばれたものである。

それはともかく、内部に検察司法の検非違使のスパイが潜入しているとすれば、法然の身に迫る危険性はいいよ現実味を帯び深刻なわけである。心配で矢も盾もたまらず、四郎高綱は駿馬を飛ばして一気に摂津から駆けつけたのである。

三

住蓮たちが吉水の禪室へ到着したとき、その中ノ房ではすでに七名ほどの法然門の高弟たちが暗い顔で何やら鳩首協議のさなかであった。

「おお住蓮か。いいところへきてくれた」

安楽房が声をかけてきた。

「何かあったのか……こちらは蓮華谷の佐々木高綱どの」

「存じあげておる。じつはな、早朝のことじゃが、此処へ前ぶれもなく検非違使の武士どもが踏みこんできた」

「もう来たのか。それでお上人さまを？」

「お上人さまだと」

安楽房は、かえって住蓮の唐突な問いに驚いたようだ。

「お上人さまを搦らめていったのか」

「いやいや、お上人さまの身に心配はない。昨夜来、また病いが発してな、今朝は未だ床におられた」

「では……」

「搦らぬ捕っていったのは、みんな小者たちじゃ。阿善坊と次郎、それと助丸」

「何だ、どれも童子ではないか」

彼ら三人は、法然門下のひじりたちの縁者で、吉水禪室で火燃しや庭掃除、炊き出しの下働きをしている少年たちだった。

「そんな童子らをしょっ引いて、何をする気だ」

住蓮は問い返さないではおれない。

「だから、わしらも思案に暮れている。検非違使の意図がわからん。それに童子らに何の罪とがもあり得ない」

「拷問にかけるのよ」

四郎高綱が初めて口をひらいた。

「拷問……」

「さよう。年端もゆかぬ童っぱをしょっ引いて拷問にか

けるのよ。さすれば先方に都合のいいことを何でも引き出せる」

断崖者たちの常套手段だという。

なまじ一人前の大人では口も固たく、抵抗するので有利な証言は引き出せない。まず小者をねらうことで効果がある。

「すると、先方はもっと大きなことを企らんでいるな」

「高綱どのの話だとお上人の身が危いそうだ」

「お上人の身がなあ」

安楽房は腕組みをしたまま考えこんでしまう。今まで彼らが論じ合ってきた以上に現実にはきびしいもののである。

「兼実公におすがりして、院に働きかけるしか道はなさそうだな」

安楽房はそう言いながら、座の右隅へ視線を投げた。そこに白哲の頭頂を光らせて善恵房証空が座っていた。

兼実公とは前ノ関白九条兼実のことである。

法然に深く帰依したこの貴族政界の超トップ。だが、法然自身は親しくても門弟たちでは接近し得ない高嶺の存在だった。わずかに善恵房だけが「筋」を持ってい

る。

善恵房証空は加賀權守親季の息で、父の死後は久我内府通親に猶子として引き取られた。法然門へもそこから入門した。当然、貴族のあいだには顔が利いた。とりわけ兼実の実弟慈円僧正とは親交があった。

兼実や慈円から情報を集めてくれば、ある程度の真相は把握できるであろう。

一座の視線は証空のうえに集中した。

「関白どの近ごろ御不興で、誰にもお会いなさらないが……」

証空はためらっている。

「吉水の僧正（慈円）ならよかるうが」

安楽房は追いうちをかけた。

もともと二人の仲は良くなかった。「選択本願念仏集」を選述した折、安楽房は途中で証空の揚言にあってその選述メンバーから外すされているのだ。

だがこの危急の場合、そんな私情にこだわってはおれない。

「吉水の僧正ならお力になって頂けると思うが」
「頼む。一刻も早くお会いして、一院の意志を確認して

欲しい」

「どうやら協議に結論が出た恰好になった。すべてを善恵房証空の情報収集にゆだねる以外にないのである。

「わしは六波羅へでも出かけて様子を探ぐってみる。一緒にゆかないか」

立ち上がりながら安楽房は住蓮に同意を求めた。六波羅で鎌倉方の情報、というよりも観測を聞き出そうという。

「いや、わしはお上人にお逢いして……のう高綱どの」

四郎高綱は大きくうなずいた。

二人はそのまま上ノ房へあがった。法然は勢観房源智ただ一人に随侍させて病床に横たわっていた。そのおこりの病いはここ十年来の法然を苦しめる宿痼となった。

「お身体でもさすりましょうか」

住蓮の申し出を、法然はやさしくことわった。

「いや、もういい。昨夜降り出してな、あれが身に障った。じきに晴れ上がるじやろう。そうすれば病いも消える。おお、そこにいるのは佐々木どのか」

なつかしげな視線を向けた。四郎高綱はさっきから平伏したまま一語も発しようとはしない。久々の会見で胸

つまる思いなのであらう。

「今朝方、次郎や助丸どもが搦められたそうじゃな」

法然はすでに事件を知っていた。

「私も今聞いて驚いているのですが、いったい何でしょうか」

「……」

「みんなも今まで首をひねっていたところでございます」

法然はそれには答えず、

「佐々木どの。おぬしの家もまぢまぢになられましたな」

「はい。兄の盛綱は鎌倉。甥の広綱や弥太郎は京の人間になってしまいました」

「悪いお方じゃ。何でも仲を裂いて、いがみ合わせることを楽しまれている」

悪いお方とは後鳥羽院をさしていたのであらうか。

たしかに佐々木兄弟の分裂には院の謀手を感じられた。長兄の定綱や次兄経高には次々と官位を与える。しかし三兄の盛綱や自分が京の勤番になった折、一度だつて会つて下さろうとはしない。

「末法末世は王家にもあてはまる。前の後白河院は平氏を弄絡し、木曾どのになびくと見せかけて裏で鎌倉どのに通じ、その鎌倉どのが天下を取れば、今度は九郎判官との兄弟争いを企らむ。これが政道だと心得ている」

珍らしく法然は、ふだんめつたと口にしたことのない政治批判をやつてのける。それも上皇方の悪口だ。

「お上人さま、お願いがございます」

高綱は口調をあらためた。

「何だな」

「この西入に、選択本願念仏集をご付法頂けませんでしょうか」

「付法するもしないもない。誰かに借りて読んだらよい」

いともあっさりと許してくれた。いささか拍子抜けだった。

高野山の蓮華谷、その念仏ひじりたちの間で「選択集」はすでに秘宝化していた。これの披読を許された者は、念仏ひじりとしてのランクが一気に二つも三つも跳ねあがるのだった。

しかも披読した者(いや、披読したと自称するひじり)は、

絶対にその内容を他へ洩らそうとはしなかった。何が書いてあるのか、どんな激越な専修思想が盛りこまれているのか。四郎高綱たちには秘仏の開眼にもひとしい憧れであった。

「住蓮」

法然はものしずかに言った。

「はい」

「佐々木どのに書写させてあげるといい」

「わかりました」

「ありがとうございます」

四郎高綱は額を床へこすりつけんばかりにした。だが、続く法然の言葉は幾分冷ややかであった。

「住蓮、あの選択集は今に焼かれるぞ」

「手前の保持している分がですか」

「いや、念仏上人たちが持っている選択集はな、すべて奪い取られ、焚書そのままだに焼かれてしまうのだ」

「なぜでしょうか」

住蓮の問いに法然は顔をそむけたまま、一語も発しやうとはしなかった。

(つづく)

◎読者の皆様へのお願ひ――

弊会会員の年会費、つまり月刊誌『浄土』の年間購読代金を、既報の通り、三、〇〇〇円といたしました。その後会員諸兄の暖かいご配慮、ご支援をいただいてまことにありがたく思っております。

さて、この機会に、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数へ―ジをさいて、新たに「読者のコーナー」を設けたいと思います。左記要領で、どうぞ振ってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

一、内容 自由 (生活の一幕や所感あるいは思うことなどをエッセイ風におまゝとめ下さい。)

一、枚数 四百字用紙五枚程度

一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 四十七巻 七月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十六年 六月二十五日 印刷
昭和五十六年 七月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒103 振替東京八八二一八七番

＜浄土選書＞新刊本

第8号 梶原重道 著
青春を生きる道 188ページ

—宗門学校に学んだ青春の喜びを、後輩に捧げる体験
的生き方をまとめた好書—

第9号 林 靈 法 著
釈尊出現の意義と浄土教 206ページ

—私の歩いた求道の遍歴—
—少年の日から悶々たる遍歴の中で求めた念仏生活開
拓の素描 念仏の風化を憂える信念の書—

既 刊 本

- (1) 仏教的生き方とは 松 濤 弘 道 著
- (2) 仏像—その語りかけるもの— 石 上 善 応 著
- (3) 善導大師—生涯と金言— 藤 井 実 応 著
- (5) 浄土宗日常勤行式の話 乗 月 乗 光 著
- (6) 大きく生きよう 高 橋 良 和 著

-
- ・体 裁 新書判 200ページ前後
 - ・頒 価 480円 (各1部とも)
 - ・送 料 1部 200円 (2部以上実費)

申 し 込 み

浄 土 宗 出 版 室

〒105 東京都港区芝公園4-7-4
TEL (03) 436-3351 (代)